

# 1. 農学部

I	農学部の教育目的と特徴	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	1 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	1 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	1 - 8
III	「質の向上度」の分析	1 - 11

## I 農学部の教育目的と特徴

本学部は、本学中期目標に掲げる基本理念に沿って、持続発展可能な社会の実現に資するため、農学、生命科学、環境科学、獣医学分野における知的、道徳的及び応用的能力を展開させて、人間活動の拡大に伴う食料・資源、環境、人口等の地球規模で深刻化しつつある諸問題を直視し、その解決に貢献できる人材の養成を教育目的として、以下の特徴をもつ教育を実施している

1. アグリサイエンス、バイオサイエンス、エコサイエンス、アニマルサイエンスを通して、社会に貢献することを目指す優秀な学生の国内外からの受入れ。
2. 農学とそれに関連した食料・生命・資源・環境に関わる自然科学・社会科学について、学科ごとに「学力・知識・思考」等に関して学位授与時の到達目標を設定した教育の実施。
3. 生命・生物機能・生物資源・環境・動物医学・人文社会系の諸科学に関する専門性に加え、課題探求能力や社会の要請に応じて積極的に使命志向型科学が遂行できる能力を身に付けた人材の輩出。

[想定する関係者とその期待]

本学部は、上記の教育目的及び特徴に照らして、以下の表に掲げる関係者とその期待に応える教育を実施している。

分析項目と観点	想定する関係者	その期待
I 教育活動の状況 教育実施体制	在学生、受験生 及びその家族、 卒業生、卒業生 の雇用者	<p><u>&lt;農学系の学部生を養成する体制が整っているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・農学全般にわたる専門教育実施体制の整備</li> <li>・共通（教養等）教育実施体制の整備</li> <li>・附属施設を活用したフィールド教育の実施</li> <li>・他大学と連携した教育実施体制の整備</li> <li>・国際交流プログラム実施体制の整備</li> </ul> <p><u>&lt;適切で多様な入学試験が行われているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高大接続を含む入学者選抜方法等の見直し</li> </ul> <p><u>&lt;多様な教育人材の配置、及び教育の質の改善・向上を図る仕組みがあるか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な教員の確保のための制度整備</li> <li>・FDの実施</li> <li>・教育改善システムの整備</li> </ul>
I 教育活動の状況 教育内容・方法	在学生、受験生 及びその家族、 卒業生、卒業生 の雇用者	<p><u>&lt;養成する人材像に適した教育課程が編成されているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・養成する能力等の明示</li> <li>・体系的な教育課程の編成と科目群の配置</li> <li>・共通（教養等）教育と専門教育の組み合わせ</li> <li>・学際的教育の実施</li> </ul> <p><u>&lt;社会ニーズに合わせた教育プログラム等が実施されているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的要請、人材需要に基づく他大学と連携した教育の実施</li> <li>・国際通用性のある教育プログラム等の実施</li> </ul>

		<p><u>&lt;養成する人材像に合わせた教育方法や学習支援を行っているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 養成人材像に応じた教育方法による教育の実施</li> <li>・ 少人数対話型ゼミによる導入教育の実施</li> <li>・ CAP 制度、GPA 制度の実施</li> <li>・ 図書館改修による自主学习等の支援環境整備</li> </ul>
II 教育成果の状況 学業の成果	在学生及びその 家族、卒業生	<p><u>&lt;適切な教育が行われ、学業の成果として表れているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 修学の観点</li> <li>・ 学生の資格取得状況や受賞の観点</li> </ul> <p><u>&lt;学業の達成度や満足度に関する調査が行われているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業アンケート、卒業生アンケートの観点</li> </ul>
II 教育成果の状況 進路・就職の状況	在学生、卒業生 及びその家族、 卒業生の雇用者	<p><u>&lt;卒業生が適切な進学・就職を行っているか&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 進路・就職の状況の観点</li> <li>・ 修了生及び進路先・就職先等の関係者、外部機関からの評価の観点</li> </ul>

## II 「教育の水準」の分析・判定

### 分析項目 I 教育活動の状況

#### 観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

##### <農学系の学部生を養成する体制が整っているか>

教育実施体制について、本学部は前述の教育目的を達成するため、大学院教育とも有機的に関連しつつ、農学全般にわたる多くの関係専門分野の教育が実践できるように、「アグロサイエンス」、「バイオサイエンス」、「エコサイエンス」及び「アニマルサイエンス」を専門領域の大きな柱として比較的規模の大きい5学科〔生物生産学科、応用生物科学科、環境資源科学科、地域生態システム学科、共同獣医学科〕による教育組織を編成している。

また、社会・産業の動向や研究動向に対応するため、岩手大学農学部との共同獣医学科を平成24年度から開設し、幅広い獣医学教育を実践している（認証評価結果2-1-①、2-(8)-6）。

全学的な教育の質を担保する全学共通教育機構を通じた教育を実施するほか、本学部の教育活動を支援する学部の附属施設として、動物医療センターや広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター（以下「FSセンター」という）を整備し、臨床教育や、各学科におけるフィールド教育に活用している（資料 I-1）。

教員の編制について、本学は研究大学を標榜しており、研究力の向上をもって教育力を高めるとの方針から、教育組織と研究組織は分離しており、多くの教員は研究組織である農学研究院に所属し、教育組織である本学部を兼務している（認証評価結果、3-1-①、2-(8)-9）。これにより、最先端研究者による講義を開講するほか、大学院教育とのスムーズな連携を可能としている。

第2期中期目標期間には大学間連携による教育の実施体制を強化した。大学のグローバル化のため、海外大学との学生交流事業に取り組んでおり、25年度より茨城大学、首都大学東京と三大学コンソーシアムを設立し、「大学の世界展開力強化事業(AIMSプログラム)」として AIMS 大学との間で学部生交換留学を行っている(資料 I-2)。

##### <適切で多様な入学試験が行われているか>

入学者選抜については一般入試として、大学入試センター試験において数学・理科は2科目を、個別学力検査の前期日程試験では数学、英語及び理科を課し、アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れている。また、推薦入試のほか、集中講義と実験教室のレポート評価、面接及びセンター試験の成績を通じて、一般入試では判定が難しい専門分野への適性意欲、目的意識、コミュニケーション能力、基礎学力等を総合的に評価するゼミナール入試等を実施し、多様な能力を有する学生を獲得している。（認証評価結果、4-1-②、2-(8)-13）。

さらに高大接続の取組として、平成26年度採択の大学教育再生加速プログラム「グローバル科学技術者入門プログラム(IGSプログラム)」において、高校2年次から大学2年次までの教育プログラムを高校と共に開発するなど、入学者選抜方法の改革につながる取組を行っている(資料 I-3)。

これらの取組の結果、22～27 年度の受験者倍率及び入学定員充足率の6年間の平均値は各々5.14 倍及び108.6%であり、適正な数値を維持することができている(データ分析集、指標番号6：受験者倍率及び指標番号7：入学定員充足率)。

### <多様な教育人材の配置、及び教育の質の改善・向上を図る仕組みがあるか>

農学部には所属する教員の研究組織である農学研究院では、若手を中心とした教育組織の活性化を図るため、平成18年度からテニユアトラック(以下「TT」という)制度を継続・実施している。本学部を兼務する教員について、第2期中期目標期間において、24名のTT教員(全専任教員の14.5%、第1期からの累計TT教員率17.6%)を採用した(資料I-4)。

また、女性教員(研究者)の養成・支援体制の整備に全学的に取り組んでおり、本学部では16名の女性教員が在籍するなど(データ分析集、2.教職員データ\_(1)教員)、研究者の多様性を確保している。

授業改善のための授業アンケートを20年度から継続して実施しており、その結果を第三者がチェックできるシステムとなっている。科目の成績分布状況を調査し、フィードバックすることで、適切な成績評価を促している(認証評価結果、8-1-①、2-(8)-37)。

さらに、教員のFDとして、新任教員を対象に、授業アンケートで学生から改善要望としてあげられた項目と評価が高い授業の特徴・ノウハウを整理した『講義秘訣集』をテキストとして活用し、効果的な授業方法、学生指導法の講義等を含む研修プログラムを実施している(認証評価結果、8-2-①、2-(8)-38)。

また、卒業生及び雇用企業等に対して、24年度において、当該卒業生が本学部のディプロマ・ポリシーに沿った人材であるかについて調査を行い、輩出した人材がこの方針に沿っているかを第1期に続き確認している(資料I-5)。

- |     |                       |
|-----|-----------------------|
| I-1 | FSセンター概要              |
| I-2 | AIMSプログラムの概要          |
| I-3 | IGSプログラムの概要           |
| I-4 | 農学系教員のTT教員採用実績        |
| I-5 | 大学教育の成果に関するアンケート調査報告書 |

(水準)期待される水準を上回る。

(判断理由)

学部の教育目的に沿った人材養成体制が整っているほか、適切で多様な入学試験が実施されている。また、多様な人材の配置、教育の質の改善・向上を図る仕組みも整っている。

特に水準を上回る点として、TT教員の採用と女性研究者の養成が高い比率で実施され、多様化による教育の活性化が高い水準で行われている点と、卒業生の就職後の調査を行い、輩出した人材がこの方針に沿っているか確認している点があげられ、関係者の期待を上回ると判断する。

### 観点 教育内容・方法

(観点到係る状況)

#### <養成する人材像に適した教育課程が編成されているか>

本学部の教育課程は、学内外に広く周知しているディプロマ・ポリシーに則って全学共

通教育科目、専門科目(主に学科の教育目的に即して専門の学術を修得するための科目)から編成され、教育目的を達成するために必要な科目群を設定している。全学共通教育科目は、大学の教育目的に基づき、本学独自のスタンダードに基づく自然科学基礎教育のための「TAT I・II」(質の向上①)、科学技術を社会との関係で位置付ける能力を身に付けるための「持続可能な地球のための科学技術」に関する科目、「リテラシー科目」等で構成されている(認証評価結果、5-1-②、2-(8)-18)。

さらに、大学院科目「開放科目」(大学院で開講されている授業科目を学部学生が履修・単位取得できる科目)の履修を認めるなど、大学院教育との接続も可能としている。

英語については、習熟度別クラス編成を平成 22 年度から 2 年間試行的に実施し、24 年度から英語の 2 年次開講科目において、1 年次後期に実施する国際的な英語検定試験 G-TELP (国際英検) のスコア及び学生の希望に基づきアドヴァンスト・ライティング等の目的別クラス編成を行うなど、学生の習熟度に応じた授業を開講している(認証評価結果、5-2-①)。26 年度には、英語科目の実施体制を見直し、28 年度から G-TELP に代えて TOEFL を活用したクラス編成を行うこととした。

また、本学部の特徴的な取組として、学科横断型教育を実現するカリキュラム、「学科横断型Φ型パッケージ・プログラム」を実施している。これにより、学びの幅と深さを実現する農学系パッケージ・プログラムを構築し、多様なニーズに対応できる人材の養成と、教育の質の向上を図っている(認証評価結果、5-1-③、2-(8)-18)。

#### <社会ニーズに合わせた教育プログラム等が実施されているか>

平成 25 年度から AIMS プログラム(資料 I-2)を実施し、ASEAN 諸国を中心とした学生交流活動を展開している。さらに国際通用性を高めるため、留学生及び日本人学生を対象に、英語による「先端環境農学・食料技術コース」を設定するとともに、27 年度までに英語による授業科目として 41 科目を開講し、シラバスの英語化も推進した(資料 I-6)。(質の向上②)

また、インターンシップを取入れた科目の設置、外国語検定試験の成績に基づく単位認定、編入学生に対する CAP 制度の除外など、多様な単位認定制度を通じて社会ニーズに応えた教育を行っている(認証評価結果、5-1-③、2-(8)-18)。

女性理系研究者の養成を目指し、24 年度「理系女子応援プロジェクト～理系女子のキャリア教育～」及び 25 年度「理数系女子進路選択支援プログラム」を実施している。本学部においては、女子中高生等を対象に、実験体験プログラム(講義・実験の説明・実験体験)を実施することで、女子の理数系進路選択に対する理解を深めている。

獣医学課程では、社会ニーズの多様化に対応するため、伴侶動物及び産業動物の先端・高度診療の実施、さらには既に獣医師として活動する者に対する公衆衛生分野における卒後教育の充実を東日本地域全体に波及させ、獣医師の技術力と専門知識の高度化を目指して、岩手大学農学部との間で共同獣医学科を 24 年度から開設し、モデル・コア・カリキュラムに基づく共同教育課程を編成・実施している(資料 I-7)。

＜養成する人材像に合わせた教育方法や学習支援を行っているか＞

教育方法の工夫として、全学共通教育科目は1、2年次を中心に、専門科目は2、3年次を中心にそれぞれくさび型に配置し、4年次では卒業論文を課し、これを重視している（認証評価結果 5-1-②、2-(8)-18）。

また、教育目的に基づき、特に実験実習を重んじて、各学科の特性に応じ、講義、講義及び演習（講義内容の定着を練習問題により図るもの）、演習、実技、実験及び実習の必要単位数を設定している（認証評価結果 5-2-①、2-(8)-19）。

学習支援の一環として、高等学校段階での理科実験不足に対応するため、「TAT 実験科目」を実施している。また、受動的な知識の蓄積型学習方法から脱却し自主的に勉学する方法を身に付けさせることを目的として、1年次学生を対象に少人数で行うゼミ形式の授業である「農学基礎ゼミ」を実施している（認証評価結果、5-2-①、2-(8)-19）（**質の向上①**）。さらに、カリキュラム・マップとカリキュラム・フローチャートにより各科目の教育目標・科目配置状況が視覚的に把握できるため、教育目標を確認しながら、履修できるように配慮している（資料 I-8）。

このほか、授業外学習を促進するため、十分な時間が確保できるよう1学期間の履修単位数の上限を原則として26単位に設定したCAP制度や、登録した科目を最後まで履修することが必要なGPA制度を実施している。これらの制度の導入により、授業外学習に割く時間が週10時間以上という学生が17年度の15.9%から27年度には20.3%に増加した（資料 I-9）（認証評価結果、5-2-②、2-(8)-20）。（**質の向上④**）

また、自主学習やグループ学習を推進するため、府中図書館を26年度に改修し、オープングループワークスペースやセミナールーム等を整備した（資料 I-10）。

I-6	AIMS 開講科目
I-7	東京農工大学・岩手大学共同獣医学科の概要
I-8	履修案内例
I-9	学生生活実態調査(第5回・第8回)
I-10	府中図書館リニューアル

(水準)期待される水準を上回る。

(判断理由)

ディプロマ・ポリシーに則った連続性と展開性がある教育課程編成および、教育方法や学習支援を行っている。また、社会ニーズに合わせた教育プログラム等も実施されている。学生の習熟度に応じた科目の設定や高等学校教育(資料 I-3)・大学院教育との接続もなされている。また、多様な単位認定制度等を定めているほか、授業外学習の促進による単位の実質化に関する取組も行われている。

特に水準を上回る点として、シラバスの英語化や英語によるコースを設置し、留学生を含めた学生が受講をしている点、社会的要請に応えるべく、女子中高生等を対象に、実験体験プログラムを実施している点があげられ、関係者の期待を上回ると判断する。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点 学業の成果

(観点到に係る状況)

<適切な教育が行われ、学業の成果として表れているか>

## ・修学の観点

過去6年間の学部学生の修業年限内(4年又は6年)での卒業率は、学部全体で平均91.8%(データ分析集、指標番号17:標準修了年限内卒業率)、「修業年限×1.5」年内での卒業率は98.4%(データ分析集、指標番号18:標準修了年限内×1.5年以内での卒業率)となっており、非常に高い数値を保っている。また、退学率は0.6~1.0%(データ分析集、指標番号15:退学率)、留年率は0.3~2.9%(データ分析集、指標番号14:留年率)、休学率は0.6~1.4%(データ分析集、指標番号16:休学率)と極めて低い水準に留まっている。

## ・学生の資格取得状況や受賞の観点

自習スペースの確保やきめ細かな個別指導など、獣医学科の卒業生の獣医師国家試験合格を支援する取組を実施した結果、第2期中期目標期間前半の3年間平均83.7%に対し、後半の3年間の平均92.8%と大きく向上した(データ分析集、指標19 受験者数に対する資格取得率)(質の向上⑥)。その他の主な資格の実績は、6年間の累計で中学校教諭第一種免許が98名、高等学校教諭第一種免許が115名、博物館学芸員が95名である。

平成24年度からは、大学Webページに本学学生の「活動・受賞」情報を随時公開しており、学士課程学生の受賞等数は、年平均で6.6件と学外からの評価を受けている(資料Ⅱ-1)。

<学業の達成度や満足度に関する調査が行われているか>

## ・授業アンケート、卒業生アンケートの観点

授業改善のための授業アンケートを平成20年度から継続して実施し、27年度後期に実施した授業アンケートの総合評価において、「授業で到達目標としている内容が身に付いた」の設問に「5.そう思う」「4.まあそう思う」と回答した割合が60.8%であった(資料Ⅱ-2)。

また、卒業時に教育課程及び教育環境等に関するアンケートを実施しており、「将来に生かせる知識・能力が身に付いた」の回答において、5点満点中、学部全体で3.89点、「専門的知識が身に付いた」の回答は4.14点となっている(資料Ⅱ-3)。

Ⅱ-1 農工大生の活動・受賞

Ⅱ-2 授業アンケート

Ⅱ-3 卒業生・修了生アンケート

(水準)期待される水準を上回る。

(判断理由)

学外等から表彰を受けた学士課程学生は、年平均6.6人であり、学業の成果として表れている。更に、学業の達成度や満足度に関する調査が行われ、いずれも高く評価されている。

特に水準を上回る点として、獣医師国家試験の合格率が第2期中期目標期間前半と後半で比較すると9ポイント増加している点あげられる。

また、修業年限内(4年)卒業率や「修業年限×1.5」年内卒業率は、非常に高く、退学

率や留年率は極めて低く、アドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシーがしっかり連動していることが教育成果の結果で表れている。

さらに、授業アンケートでの「授業で到達目標としている内容が身に付いた」割合や、卒業時アンケートでの、「将来に生かせる知識・能力が身に付いた」「専門的知識が身に付いた」が高く評価されており、関係者の期待を上回ると判断する。

## 観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

### <卒業生が適切な進学・就職を行っているか>

#### ・進路・就職の状況の観点

キャリア支援の取組として、平成25年度に同窓会から提供された卒業生の就職データを基にした就職支援システムの運用を開始した。また、同年度には総合学生データベースシステムの運用を開始するとともに、27年度には、入試データ、成績データ、就職データの分析を行い、学修成果の可視化につながる基礎資料とした(資料Ⅱ-4)。

また、22年度から「就職ガイドブック」を作成しているほか、22～27年度において、説明会や進路(就職・進学)ガイダンス・模擬面接等を年平均25回実施している。(資料Ⅱ-5)

その結果、本学部卒業生の進路は、大学院進学が22年度で53.9%、27年度で61.0%と高く、22～27年度平均として55.7%の学生が進学している(データ分析集、指標番号21:進学率)。

就職希望者に対する就職率は、22～27年度平均として87.5%となっており、高い水準を維持している(資料Ⅱ-6)。

就職先の状況としては、公務員、製造業、学術研究・専門・技術サービス業等の多様な専門性を求められる業種(データ分析集、指標番号24:産業別就職率)にわたっており、教育目的に沿った人材を輩出している。

#### ・卒業生及び進路先・就職先等の関係者、外部機関からの評価の観点

23年度に経済誌が実施した「就職に強い大学ランキング」では、全国第8位にランクされている(認証評価結果、6-2-①、2-(8)-30)ほか、27年度には、雑誌社によるランキングにおいて「グローバル企業就職率(調整値)ランキング」で全国第8位にあげられた(資料Ⅱ-7)。

また、24年度に、本学が実施した主要就職先企業36社の人事担当者に対して行ったアンケート調査では、卒業生の印象として、「専門的な知識・スキル」「自己学習力」「問題解決力」「対人関係力」が優れているという評価が寄せられた。これは養成する人材像と一致している(資料Ⅰ-6)。

Ⅱ-4 総合学生データベースの概要

Ⅱ-5 進路ガイダンス・模擬面接等実施実績(平成22～27年度)

Ⅱ-6 就職希望者に対する就職率

Ⅱ-7 「グローバル企業就職率(調整値)ランキング」(平成27年度)

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 就職支援システム等のデータベースシステムを活用しているほか、進路ガイダンス等を実施するなど適切なキャリア支援が行われている。

特に水準を上回る点として、22～27年度には、年平均 54.6%の学生が大学院へ進学しているなど教育目的に沿った人材が輩出されている点、外部機関による就職ランキング等において高い評価を得ている点があげられ、関係者の期待を上回ると判断する。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

教育活動の状況は、第2期中期目標期間中に、以下のように3つの観点で変化・向上した。

##### ①新たな共通教育科目の導入による理系学生としての素養確保

平成22年度から、本学独自のスタンダードに基づく必修共通教育として、「TAT科目」(理数系科目)、「MORE SENSE 入門」、「農学基礎ゼミ」を開始した。これにより、農学諸分野に進むための基礎知識と幅広い自然科学基礎学力を担保でき、本学部の教育目的に沿った理系学生としての素養を確保することができた。特に「農学基礎ゼミ」は他学科の教員の下、少人数のゼミ形式で行う独自の科目で、アクティブラーニングの先駆けである。

##### ②グローバル化の推進

25年度から、世界展開力強化事業としAIMSプログラムを実施している(資料Ⅲ-1)。自主的な留学や研修を促進するため、「海外特別演習Ⅰ～Ⅳ」、「海外特別実習Ⅰ・Ⅱ」の科目を学部共通専門科目として設置した。また、受入れ学生のための英語による科目も41科目設定するなど、グローバル化を推進した。これにより第1期後半から第2期中期目標期間初期は0.3%だった学生の海外派遣率も4.9%に上昇した(データ分析集：指標5在学生の海外派遣率)。

##### ③アドオンプログラムや新科目設置による社会実践教育の実施

26年度からアドオンプログラムとしてEDGEプログラム(26年度10名、27年度15名の履修者)、27年度には9年一貫グローバル教育プログラムのプレプログラムである、グローバルアカデミーを開講(履修者25名)、海外研修や海外学生とのワークショップ・異文化交流などを通じて、よりグローバルな視野を養った。

また、27年度からは「農学部特別講義Ⅰ～Ⅲ」を設定、産業界などの講師による講義を単位化した。さらに、EDGEプログラムにおいて起業家マインドを醸成するプログラムを実施するなど、第1期と比べて、より社会実践的な教育機会を増やすことができた。

以上のことから、教育目的に照らし、教育活動において、重要な質の向上があったと判断する。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

教育成果の状況は、第2期中期目標期間中に以下のように3つの観点で、変化・向上した。

**④授業外学習の向上による単位の実質化**

「単位の実質化」において、授業外学習に割く時間は、1週間で2～6時間が多いが、週10時間以上という学生が17年度の15.9%から27年度には20.3%に増加した(資料Ⅰ-8)。これは、授業外学習を促す取組が活かされていると判断でき、学業の成果について質の向上が見られる。

**⑤学業の達成度や満足度の向上**

大学に対する満足度が、21年度に88.6%であるのに対して、27年度は90.8%となっている(資料Ⅲ-2)。本学は、全学を通して学生の満足度が非常に高いことが特徴であるが、本学部は特に満足度が高く、かつ第1期中期目標期間と比較して着実に向上している。このことから、教育全般の成果に関しても質の向上が見られる。

**⑥獣医師国家試験合格率の上昇**

獣医師国家試験の合格率について、学系の全国平均が下がる中、本学の合格率は、第1期目標期間(暫定評価期間)平均と比べて4.4ポイント上昇し、第2期中期目標期間平均で88.3%となった。第2期中期目標期間後半3年間の平均値は92.8%となっており、はっきりと成果が表れた。

以上のことから、教育目的に照らし、教育成果において、重要な質の向上があったと判断する。

Ⅲ-1 AIMS プログラムの実施状況

Ⅲ-2 大学に対する満足度の推移